改めて「土木は市民工学」

（特非）シビル NPO 連携プラットフォーム
代表理事　山本 卓朗

明けましておめでとうございます。

一昨年から CNCP 活動の見直しを行ってきましたが、NPO としては、より市民に近い立場で土木の活動をみていくべきだという議論になり「土木と市民社会をつなぐ」というテーマを基本に据えることにしました。そして、土木、どぼく、土木工学、シビルエンジニアリング・・・などについて意見を交わす機会も増えています。

平成 30 年 5 月の CNCP 通信から巻頭シリーズで、土木学会広報センター次長の小松 淳氏の執筆になる「土木ということば」を連載しています。土木という言葉のルーツとして、中国春秋時代の淮南子にある“築土構木”がしばしば引用されてきましたが、辞典でほんの数行でしか書かれていない土木・どぼく項目でその本質を説明することはまったく不可能であり、あらためて土木の言葉のルーツ探しをやってきた詳細な成果がコンパクトに報告されています。今回シリーズはごく少ない字数でさわりのみの記載ですので、難解な漢字の羅列になっていますが、いずれ解説付きの論文が出されるものと期待しています。

さて違った観点から土木・土木工学を見てみますと、ローマ時代のインフラ整備はほとんどが軍事目的であり、「すべての道はローマに通ず」というのも軍用道路にほかなりません。時代が進み、上水道などのインフラは、市民生活のためにつくられるようになっていきます。すなわち軍事工学 military engineering に対する非軍事工学 civil engineering の誕生です。その後ヨーロッパの学問が進む中で、civil engineering から冶金、金属、電気、機械、化学などが次々に分化していきました。そのなかで土木工学は civil engineering を継承してきました。こういう歴史から土木の先人は、工学のルーツである土木の総合性を誇りとして、工学の細分化がもたらす弊害を諌めています。土木学会の初代会長古市公威は、学会設立時の訓戒として「余ハ極端ナル専門分業ニ反対スルモノナリ」と述べたと言われています。このような歴史を考えたとき、土木工学すなわち市民工学である、と言い切っても良いのではないかと思います。

現実に私たちが取り組んでいる土木工学分野も、土木学会に数十の調査研究委員会があるように、限りなく細分化していきますが、“土木のもつ市民社会との本質的なつながり”をしっかりと認識して行動すべきだと改めて考えたいと思います。

本年も引き続き、皆さまのご支援よろしくお願いいたします。